

Title	支那考古學論攷(梅原末治著, 弘文堂發行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.1 (1939. 9) ,p.178- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

にあつては矛盾對立の側面が強調されるのであるが、三極的絕對媒介に於いては矛盾對立は鈍磨され、其の代りに和解が成立する本來の意味に於ける矛盾對立は二つのもの間に於てのみ存するのであり、これに第三のものを加へるときは矛盾對立は其だけ尖鋭さを減少する。従つて二極的辯證法から三極的辯證法に移ると云ふことは矛盾對立を緩和することであり、この三極的媒介が絕對的三極的媒介にまで完成される時は矛盾對立の辯證法は和解の辯證法に止揚されるのである。而して和解の辯證法は宗教的和解が和解の類型的なものなるが故に、宗教的辯證法又は愛の辯證法と呼ばれるのである。教授が何故にかかる愛の辯證法を考へるに至つたかについては、結局教授の體驗的要求からと云ふより他にないであらうか、然し教授の考へ方をどこまでも徹底せしめるならば、其は敢へて辯證法と呼ぶべき理由はなくなるのではないかと考へられる。

更に教授によれば種の論理に於ける否定即肯定、肯定即否定は一見同時的の如くであつても實は異時繼起的である。其は肯定から否定への、又否定から肯定への轉換に他ならない。そして轉換は異時繼起的なるもの間に行はれるより他ないのであつて、其の限り轉換は一方向的と考へねばならぬ。従つて肯定即否定、否定即肯定の統一は兩者を同時的に、従つて高次の靜止に於て包越したものでなければならぬ。此が即ち教授の云ふ體系的なものなのである。

要するに西田・田邊・高橋三氏の根本的立場の相違は結局次の如く要約出来るかと思ふ。即ち西田哲學が場所的辯證法或は無の

辯證法であり、田邊哲學が種の論理による絕對媒介の辯證法と云ひ得るに對して、高橋教授の立場は、教授の言葉によれば包辯證法の立場である。ここに教授の所謂包辯證法の立場とは辯證法を包越するものの立場、具體的體系、高次の靜止の立場を意味する教授の具體的體系とはすべての活動をそのままに包越するところの高次の靜止としての全體的存在なのである。西田・田邊兩博士の哲學は要するにヘーゲル的であり、此を歴史的社會的現實に具體化せんとするの試みである。ヘーゲルをヘーゲル的に超越しやうとするもの、其が西田・田邊兩博士の哲學である。これに對し高橋教授はヘーゲルを超越するの他の新たな道を本書に於て提出したと云ひ得るであらう。只私は高橋教授の包越の概念が、教授が有限の人間存在の分析に止まり得ず、有限存在の外に絕對無限者を考へるところから、ヤスデイスの所謂包括者の概念に相通するものあることを附記して蕪雜な紹介の筆を擱きたい。(宮崎友愛)

支那考古學論叢

(梅原末治著
弘文堂發行)

考古學者として著者は誠に我國の世界に誇るべき最高峯の一人である。著者が最近學位を得、教授に昇進せられたるも實は遅きに過ぐと云ふ感無きを得ない。本書は氏が最近十年諸學術雜誌に掲載された支那考古學に關する諸論文主として青銅器、殷虛出土物等に關するものの一部を蒐録したるもの、本書によつて吾人は支那考古學の進歩の道程を辿ることが出来る。諸雜誌に發表せられ吾人の座右に備へ難かつた各篇が一括して容易に利用し得る

様纏められたのは吾々に先づ悦びを興へる。道野氏との間にとりかはされた支那銅器時代有無に關する論争を始めとして支那の古鏡の沿革、殷虚出土の戈式利器の考察、白色土器の研究、亦新發見の戰國時代の釉藥ある明器、漢代の玻璃、漆奩、戰國時代らしき傳長沙出土の木彫怪獸像等に關する興趣深き紹介を始めとして東亞の古瓦に就ての總括的記述、歐米博物館の支那古美術蒐藏品に就ての概述等極めて有益なる記文が順序よく排列せられてをる。殊に著者によつて當時初めてその真相を窺ひ得た安陽侯家莊殷代墳墓の發掘の紹介など金村古墓の記述と相待つて古代史研究者必讀の文字である。たゞ本書を通じて望蜀の嘆に堪えなかつたのは著者が親しく支那内地の發掘に手を下し實證的に支那考古學の開拓に當られることが事變前に於て自由でなく爲に何となく推論に薄物を隔てて物を見る觀のあることである。今や幸に事變は日本側に有利にして我國學者にして奮發すれば支那内地發掘可能の状態にある。吾人は本書の著者が大發掘團を督し敢然安陽其他の遺跡發掘に着手せられん日の一日も早く到來せんことを期待してやまない。百の論議は一の正確精密なる發掘によつて解決される。此點考古學は誠に有利な立場である。たゞ中央研究院に見る如く國內の俊秀を網羅し一丸となした最高學術機關が此重要な發掘事業の當ると云ふことが我國の學界の如く四離滅裂、統一協同の精神の缺けた現狀をもつて果して實現可能かと云ふ問題である。最近或事件により在外學術關係者達の狹量に驚いた吾人は日本人の島國根性、非寛容性、繩張り主義が大陸の文化的開拓に多大の支障をなすことを今から危惧せざるを得ない。吾々は日本に

於ける文化科學が近代的な組織化の道程をとり、その封建的の殘骸を一日も早く打破せんことを希望する。日本の學者は各自その象牙の塔を出で、今少し相接觸し、總親和の實を擧ぐる様努力すべきではなからうか。専門學が發達するのは諸學問の相互提携が完全に行はれることを前程とする。協調が行はれずして互ひに障壁を高くし専門呼ばはりをするのはいさゝか筋違ひである。(松本信廣)

宗教社會學——學說・研究

(古野清人著)
(河出書房發行)

嚮にデュルケムの名著「宗教生活の原初形態」を譯出して、學界に大きな貢獻をされた著者が、宗教の社會學的研究のデュルケムに至る過程と、彼の偉業を繼承するデュルケミアンの現況・動向と、更にデュルケイミスムの發展のための著者自らの研究とを、一卷に纏められたのがこの書である。

本書の内容を目次的に紹介すれば、第一篇宗教社會學説が六節に分れ、先づ「宗教社會學の略史」では、筆をルネサンスに起してド・プロスやフュステル・ド・克蘭ジユ等がデュルケムの先驅として、正しい位置を興へられてゐる。次でデュルケムの學説に對する的確な紹介が行はれた後、デュルケイミスムの發展が敘され、中に就て重要なデュルケムの後繼者モスの學説が詳細に紹介されてゐる。更に「新フランス學派の宗教學説」に於て、ユベル、モス、ザルノウスキ、ダギ、モレ、グラネ、アルバク、エルツ、ブグレ、ベイエ、モニエ、シミアン筆に對する鳥瞰が行はれ、最